

筑波大発「おもてなし学」講義

2020年東京五輪で「ホスト役」として活躍できる若者を育てるため、筑波大が総合科目の一つとして「おもてなしの心」や日本と海外の礼儀作法などを学ぶ講義を4月からスタートさせた。大会期間中に訪れる外国人は延べ約1000万人といわれ、国際的マナーを身につけたボランティアの養成は大きな課題。受講する学生たちには、大会運営に携わる約8万人のボランティアの中で指導的役割を担うことが期待される。

「隣の人と握手をしてみましょう」と講師の声が響く。教壇に立つのは元日本航空客室乗務員でビジ

ネスマナー研修などを手がける江上いずみさん。写真やイラストを交え①差し出すのは必ず右手②手を出すのは上位者や年長者から③男性は女性が手を差し出すまで待つのがエチケット—などと握手の国際常識を解説。履修する約60人の学生たちは意外にうるさいマナーに驚きながらも実践に移る—。

「異文化コミュニケーションの実際～グローバルマナー」と題した講義では、国際舞台で求められるマナーの基礎知識、相手の文化や習慣を理解した上での臨機応変の立ち居振る舞いなどを座学と実践で学んでもらう。「お互いの心

筑波大で始まった「おもてなし学」の講義。将来の国際舞台を見据え、学生たちが握手のマナーなどを学んでいる—茨城県つくば市の筑波大（森田景史撮影）



が通い合って『おもてなし』は成り立つ」（江上さん）との観点から、日本と欧米の歴史、それぞれに育まれたマナーの文化的背景な

握手マナーなど東京五輪ホスト役育成

ども考察する。歴史や宗教、実技など広範多岐で「総合科目に組み込み、1単位がつくようにした」と筑波大の担当者。講義は計10回で6月には期末試験がある。

腰を曲げる角度で意味が異なるお辞儀の作法など、機上で約30年の接客経験を持つ江上さんが培ったノウハウは、就職活動やビジネスの場にも生かせるとあって、学生たちには好評だ。

「海外に活躍の場を求める『内から外』のグローバル化と、海外から訪れる外国人に対応する『外から内』のグローバル化の両方に対応したい」と江上さん。五輪史や五輪教育に詳しい筑波大の真田久・体育専門学群長は「全国の大学に先駆けて、筑波大の特色にしたい」と意欲的だ。